



20
俄語文庫

五

5
1139
20



利
1639
卷 20

西嶺
書不歸
言

道

同
書
不
歸
言

道

西嶺
書不歸
言



本公居士

中稿

帳とて如例とてしん所ふす
 其よりみしそふ所ぬ當可難
 明中々後の上を於此中し
 明中々後の上を於此中し

招起俳諧と連歌

居士

高き立柳かれ野のまきや柳葉

あかりにみえふと白く柳夕

からい米小きふくともぬきもて

よれぬうららかにもて雁物

月よりくやもる影のけつかく

中々まきあふおやふ

一 龍

龍 友

渡 来

音 洞

梅 々

省睡うもめを袖味惜う者より

薔又の薔花のほとけけんて

つらひうけつて結白気あき

根のをききてもつらう

とまのほゆもあつてとまをもち

とまはむもあつてとまをもち

糸のふくぬき月あつてもひく

とまのふくぬき月あつてもひく

米 室

毛 居

かつ

十二雄

薬 圃

直 明

丹 頂

故 権

よき根株のうへ枝一尾を成	勝
風より一尾を成	見
吹れ来るも向ふもやちを成	十三
あゝとれりしとてさう跡を成	笑
風より一尾を成	園
吹れ来るも向ふもやちを成	花
風より一尾を成	可
風より一尾を成	也
風より一尾を成	明

本公老人いまだ梅の年々と雪のうへを
牡丹雪をなす秋を田あのみりたる

けいんもらひ一尾を成
丹頂

梅華一尾を成
かつ

尾を成
観

松風のうへさし
田

少きものも信よりうしろく復り死とせよ
清くくくく 静くくくく

夢のむねやうららのたもけくく 景 秋

十八日かゝるくも休けりーくかききとふ
くうくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく 宋 淵

改めくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

精進のけぬくくくくくく 宋 室

くくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく 柳 権

くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく 乙 龍

本公老人のきこひあつれきあふをみせし
息をきくのをきくをきくをきくをきくを
きくをきくをきくをきくをきくをきくを

花の山にふくみし物をもむ

梅々

牌あふ念珠とつくりし

手しりし物をもむしりし物をもむ

毛居

花より天にふくみし物をもむしりし物をもむ
二男よりふくみし物をもむしりし物をもむ
ある一男よりふくみし物をもむしりし物をもむ
ある一男よりふくみし物をもむしりし物をもむ
ある一男よりふくみし物をもむしりし物をもむ
ある一男よりふくみし物をもむしりし物をもむ

けしきしりし物をもむしりし物をもむ
けしきしりし物をもむしりし物をもむ
けしきしりし物をもむしりし物をもむ
けしきしりし物をもむしりし物をもむ
けしきしりし物をもむしりし物をもむ
けしきしりし物をもむしりし物をもむ

花の山にふくみし物をもむ

着洞

花の山にふくみし物をもむ

栗岳

花の山にふくみし物をもむ

沖文

おれをぬくといふおれをさるる府の日々を
すしやうといふの隙にやういふこと

おれをぬくといふおれをさるる府の日々を

渡来

おれをぬくといふおれをさるる府の日々を

おれをぬくといふおれをさるる府の日々を

飛友

おれをぬくといふおれをさるる府の日々を
すしやうといふの隙にやういふこと

おれをぬくといふおれをさるる府の日々を

一飛

おれをぬくといふおれをさるる府の日々を
すしやうといふの隙にやういふこと

おれをぬくといふおれをさるる府の日々を

井

海入船のうろこひく秋をり
蟻まうくやうかき生魚
ちんちんた振てふけあるもの
鯉のそらふのうろこひく

龜 洞 友 来

嘉永二酉至四月

ちんちんた振てふけあるもの
うろこひく秋をり
早鮒のうろこひく秋をり
ちんちんた振てふけあるもの
ちんちんた振てふけあるもの
ちんちんた振てふけあるもの
ちんちんた振てふけあるもの

木 色

公 洞 公 洞 公 洞

或る時、移る鬼の版と歌、
その版もれども、
もつる世も、
園の、
雪、
穀、
月、
旅、

公 洞 公 洞 公 洞 公 洞 公 洞

作、
古、
ひ、
屋、
業、
解、
信、
曲、

公 洞 公 洞 公 洞 公 洞 公 洞

呼ぶ声は遠くから

云

新羅宮庭より

云

移りて内庭とせしめ

云

宿舎ふもきく

云

多きふふ二時計の時

云

竹枝ひくく

云

鐘の音は

云

秋を再び

云

塩辛く

云

正座

云

ほろく

云

さる

云

花の

云

さる

云

みき初め

孫ふもはあまけ賦ふまふあま
石路も鏡もふたふた
切迫の村本鏡ふたふた
村もふたふた海ふたふた
おふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

木 公
新 甫
渡 来
公 甫
来

まけられやふふふたふた

何うううううううううう

うううううううううう

ふふふふふふふふふふ

強力のふたふたふたふた

啼 聲りやうううううう

ふふふふふふふふふふ

被ふふふふふふふふふ

公 甫
来 公
甫 公
来 公
甫 公

うきやうのあつてもうきやう

木

うきやうのあつてもうきやう

木

小利のあつてもうきやう

木

平利のあつてもうきやう

木

三周の法をうきやうのあつてもうきやう
一をばうきやうのあつてもうきやう
二をばうきやうのあつてもうきやう
三をばうきやうのあつてもうきやう
四をばうきやうのあつてもうきやう
五をばうきやうのあつてもうきやう
六をばうきやうのあつてもうきやう
七をばうきやうのあつてもうきやう
八をばうきやうのあつてもうきやう
九をばうきやうのあつてもうきやう

うきやうのあつてもうきやう

木

うきやうのあつてもうきやう

木

うきやうのあつてもうきやう

木

うきやうのあつてもうきやう

木

うきやうのあつてもうきやう

木

うきやうのあつてもうきやう

木

うきやうのあつてもうきやう

木

ad

十一

卷之五

小鰐の鱗の骨

角力の入りも多しと証物

牽の柄漏り傳ふる先

かゝる慶長よりこの時へ

何々思之故安んずる也

屏風小婦之吾妻新畫

井 乙 井 乙 井 乙 井

么 井 么 井 么 井 么 井

喉へさる眼疾う丁度眼赤く
 二宮おのゝふくろも用ゑ
 帷へぬき入いふさ其の内
 へあふまのほのるあやう
 折られ笑顔えきて移るる
 仰いそけとさうりぬみら
 思ふはく内へ移るのせぬり
 喰ふれさるるさのまの毛

井 乙 井 乙 井 乙 井 乙

秋へ移る眼疾もかへけや
 渡り座の氣も移り
 あらうちを離れおふ都をまき
 このもももさへ移るの移さ
 喰ふちをの持りもきあへおき
 毒探みへてかへ平海を
 こへ移るのさ秋のあやうさ
 喰ふは渡りさるるさの毛

井 乙 井 乙 井 乙 井 乙

海内玉皇殿と記してありふふし
 巡る要と如くありあり
 初時よりありありとありあり
 あらもあつて記かゝるありあり
 なるのありありとありあり
 はらへりありありとありあり
 十月やあつてありありとありあり
 海内やあつてありありとありあり

海内玉皇殿と記してありふふし
 巡る要と如くありあり
 初時よりありありとありあり
 あらもあつて記かゝるありあり
 なるのありありとありあり
 はらへりありありとありあり
 十月やあつてありありとありあり
 海内やあつてありありとありあり

風也くくくくくくくく

くきく

くくくくくくくくくく

阿波 羅村

くくくくくくくくくく

半 夢

くくくくくくくくくく

木 田

くくくくくくくくくく

左 一

くくくくくくくくくく

淡路 翁 池

くくくくくくくくくく

紀伊 桑 丘

くくくくくくくくくく

播磨 鼎 左

くくくくくくくくくく

杜 鴻

くくくくくくくくくく

素 屋

くくくくくくくくくく

山 公 成

くくくくくくくくくく

野 池

くくくくくくくくくく

文 海

くくくくくくくくくく

多 岳

くくくくくくくくくく

危 不

くくくくくくくくくく

五 律

きりくすくすおろしーくを籠
 陽春や輪ふーてあふも船の綱
 帝もくく確ふ難るも杉山家か
 姉くくく柳ふくくお難く田
 ふく眼ふくくあふくくあふくく
 柳所のふくくあふくくあふくく
 おあふくくあふくくあふくく
 くら月のふくくあふくくあふくく

井
 淡
 有
 水
 雨
 柳
 梅
 村
 里

加賀
 能登
 越中

むくくくくはくくくくくあふくく
 陽春や飛の遠くくくあふくく
 おくくくくあふくくあふくく
 水もくくくあふくくあふくく
 あふくくくあふくくあふくく
 けくくくくあふくくあふくく
 ゆくくくくあふくくあふくく
 くら月のふくくあふくくあふくく

老
 圃
 素
 菜
 有
 位
 不
 美
 河
 川
 龍
 湖
 其
 殊

佐渡

嘯
高

葛古

子之

山士

清涼

甲斐

阿聘

梨邪

聲
愛

厚德

而作

士
前

靜愛

素陽

৪৩
১৩৩

不美

立忘

士芳

一傳

十九

・ 平よむらゝく星さくふ松の舟

梅 裡

・ 夢さく川はさく揺るや夜半夜

三 河 完 伍

・ 白きお風ふさくくぬ一き星

き 蓮 宇

・ けしきさく星の輪や五月晴

き 杜 水

・ おさくくさく入るやきくす

お 嵐 牛

・ 夢さく也神のゆさすの神つ先

お 以 野

・ 物さくくくくくくくくくく

六 宣

・ 囉さくさくしきもけや略一羽

志 年 郎

・ 五佐崎くくくくくくくくく

小 載

・ くのさくくくくくくくくく

思 樂

・ たりもや軍さくくくくくく

花 兄

・ 少く玉乃梅くくくくくく

水 壺

・ 枝折くくくくくくくくく

標 笠

・ 平水やゆくくくくくくく

明 水

・ ちくくくくくくくくくく

乙 五

乙 五 甘 首 子 旁 可
 雄 雀 葉 磨 友 象 量

如 祿 禾 永 秋 模 如 來
白 欠 曉 厚 重 尙 交 志

里木
 幽々
 黙栗
 香珠
 雛雪
 茶武
 系治
 文女

南池
 鼓汀
 本和
 穂市
 枇杷
 風雛
 柳登
 其系

山嶺といふもぬきけりわしの難
さうふとけい人の心も辛まじ
ぬきくも時ぬきくもいふ
大寺のまきけりぬきぬき
有るけりぬきぬきぬきぬき
休もいふもぬきぬきぬきぬき
さうけりぬきぬきぬきぬき

水露
山
さ
さ
酒
案
菊
美

物いふもぬきぬきぬきぬき
さう月やぬきぬきぬきぬき
さういふもぬきぬきぬきぬき
さういふもぬきぬきぬきぬき
さういふもぬきぬきぬきぬき
さういふもぬきぬきぬきぬき
さういふもぬきぬきぬきぬき
さういふもぬきぬきぬきぬき

完
涼
男
其
三
森
梅
旧

中々きけ人のけしきも
 二つはきけ人もしきも
 あああきけ人もしきも
 解をけきしてあきけも
 梅もあきけのしきも
 梅のあきけのしきも
 梅のあきけのしきも
 梅のあきけのしきも
 梅のあきけのしきも

友家
 青吹
 好又
 曾連
 方水
 修方
 旦雷
 湛末

水のきけ人もしきも
 水のきけ人もしきも
 水のきけ人もしきも
 水のきけ人もしきも
 水のきけ人もしきも
 水のきけ人もしきも
 水のきけ人もしきも
 水のきけ人もしきも
 水のきけ人もしきも
 水のきけ人もしきも

有柳
 茂家
 曾末
 而耕
 耀水
 素文
 素風
 一

涉女 聲史 可竺 一昂 山子 壽道 奇三 聚玉

五渡
上流
下流
李

きふのふくかきまききれが
仇らうききく降やまのき
奪られくきききき花
きききききききき
人のきききききき
角かきききききき
情ききききききき
稲ききききききき

春
月
西
一
以
可
旭
多
多

居ききききききき
はききききききき
ききききききき
海ききききききき
要ききききききき
はききききききき
海ききききききき
えききききききき

清
山
茅
左
松
六
一
盤
島

一葉も留るぬきくつ時

青海

時移りてきくつてきくつて時移り

松

小崖

花乃ち花の顔よりきくつてきくつて

已有

堀苗一井ふ神海よりきくつてきくつて

旭

さめくつてきくつてきくつてきくつて

浮山

ふきくつてきくつてきくつてきくつて

一林

きくつてきくつてきくつてきくつて

葱玉

くつてきくつてきくつてきくつて

中

市風

たきくつてきくつてきくつてきくつて

素山

きくつてきくつてきくつてきくつて

吟風

かきくつてきくつてきくつてきくつて

市山

松きくつてきくつてきくつてきくつて

桂仙

牛の背のきくつてきくつてきくつて

松

翠眠

梅枝のきくつてきくつてきくつて

契史

くきくつてきくつてきくつてきくつて

安遠

涌きくつてきくつてきくつてきくつて

古棠

有るも牡丹や——

李 邦

云々云々も南のふらふらと

雅 佛

まづ梅やか——

市 猿

薄ふおらむ風のあふみ

下
甘 雲

事々々々々々物もかぬや

華 介

ア——

未 費

音程し——

浮 山

さうのう——

故 亭

わ——

桃 朝

紅錦と歌ふか——

友 松

あうの——

久 宣

さうれ——

宋 堂

几中——

榮 欣

初——

山 登

初——

本邦
一 郎

まのけ——

琴 堂

答 邱

白
页

仁星

如牛

龍
甫

鳥
燒

花
旌

費乎

素吟

君反

蚌珠

玄
素

梅岩

山
石

仁星

菊分

船夕の御ふりやうをたふさうが

嵯山

かれうやれふく家の為を

繁岩

人の波をやうふれ君の妻

文河

川うま馬のかけようをの月

能云

ももつらもくくくくくくく

香山

平云

逢起のむくくくくくくく

曲川

まきもれやうふさぬうちのかう系

松郎

さむくやうくくくくくく

茶瓢

有くくくくくくくくくく

大岩

風をくくくくくくくくく

弘美

くくくくくくくくくく

宋海

くくくくくくくくくく

桐林

みくくくくくくくくく

子弘

くくくくくくくくくく

耳嵐

日暮くくくくくくくく

ノ左

多う風やも無きやうにやあつても
雨の日はうらやましいよき時や
すくすく木槿のさきより哉
おうらやあつてもうらやあつても
啼き立てる鳥のうらやまの虫
ゆき風やあつてもお風と無のう
降うされてゆきあつてもやまの
海苔のうらやまや浪もさうな

新和
史山
潮堂
葉也
睡臨
雪仙
時彦
佳音

急や水あもむき角田川
五月晴も様一輪さうなま
腰うけをあれうらやまの
梅くさけをさうなうらやま
又うきを修うらやまの
田のうらやまをさうなま
あつてもうらやまの
是はあつてもうらやまの

蓬洲
桃乙
夢外
野外
遠香
姑山
俳一
権室

塩漬ぬりて焼くは秋の味

塩漬

煮物ぬりて焼くは秋の味

煮物

白く煮て焼くは秋の味

白煮

醤油煮て焼くは秋の味

醤油

大煮物煮て焼くは秋の味

大煮物

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

ふりかけに焼くは秋の味

ふりかけに焼くは秋の味

ふりかけに焼くは秋の味

ふりかけに焼くは秋の味

ふりかけに焼くは秋の味

ふりかけに焼くは秋の味

ふりかけに焼くは秋の味

半一乘一 取尤少孝且神佛と
多むのせらぬ 路の末末をたふし
相見新式も能く 今より果ては巡遊し
ふふふふ 風俗とつて 徳人なる
を重んず 四化は 今より 徳に 當能
一善といふ 孝ふ 孝ふ 孝ふ 孝ふ
ふふふ 二通 二通 武を 武を 武を 武を

既ふ 既ふ 既ふ 既ふ 既ふ 既ふ 既ふ 既ふ
未ふ 未ふ 未ふ 未ふ 未ふ 未ふ 未ふ 未ふ
ふふふ 生れ 生れ 生れ 生れ 生れ 生れ 生れ 生れ
清通の 清通の 清通の 清通の 清通の 清通の 清通の 清通の
つて 経典 経典 経典 経典 経典 経典 経典 経典
未ふ 未ふ 未ふ 未ふ 未ふ 未ふ 未ふ 未ふ

其應記見世年冬 紙と新野井

七千二百

續古



乙未廣澤

丹羽一龜 友 莊

京都

三條通掛屋

出雲寺文次郎

六

心齋橋通安堂寺町

秋田屋太右衛門

心齋橋通止久太郎門

河内屋喜兵衛

心齋橋通博勞町

河内屋茂兵衛

日本橋通壹町目

須原屋茂兵衛

漫草茅屋二町目

須原屋
伊

日本橋通二町目

山城屋佐兵衛

神明前

岡田屋嘉七

同

和泉屋吉兵衛

合鄉成道

英
文
藏

芝
食
目

萬屋忠藏板

三都

發行

書肆

江坂

大

京都

尸

